

# 批判書

karinomaki

## 読みやすいのに・・・？

---

朝の連続テレビ小説で、「花子とアン」というのをやっていました。私は個人的には、ヒロインの村岡花子を務めた女優の、吉高由里子の、人に甘えるような仕草や声や、顔が嫌いなのですが、女優としての演技は素晴らしいと思いましたし、内容もよかったです。しかし、村岡花子が生涯をかけて、戦火の中を逃げ回りながらも訳した、「赤毛のアン」が、どうしても、人にとって、特に、人生を戦う人々にとっていちばん有害な図書に思えます。その理由について書きたいと思います。

赤毛のアンは、たいへん面白い本で、村岡花子の訳も、色彩豊かで、たいへん素晴らしい。しかし、有害なのです。何故でしょうか。読みやすく、受け入れやすいのに有害？

これは、村岡花子の犯した罪と言えるのです。

## 村岡花子の罪とは？

---

有害な本を、あんなに魅力的に、読みやすく変えてしまった。これは大罪です。

まず、赤毛のアンは、「苦しむ」ということを、人生から完全に排除してしまいました。

どうして、苦しまないといけないのか、それは、真理を悟るためなのです。愚かな人は、苦しんでも苦しんでも、考えようとしている。だから、苦しんだことだけが偉いわけではなのですが、大切なことは、考えること、そして、償うこと、そして、懺悔することです。

赤毛のアンには、その深さが一つとしてありません。全てが、アンの「幸せな想像」に消され、埋められてしまうのです。

アンは、真に泣くということを一つもしません。切なさすら知りません。

頭髪が赤いことを気にし続け、それを「ニンジン！！」とからかったギルバートを目の敵にし、勉強する理由も、成績が良い理由も、全てギルバートに勝つためだけです。なんと愚かな女だろうと思います。しかも、続編では、ギルバートの愛を受け入れて結婚して幸せになるという、めちゃくちゃな筋書です。

何故、このような本を、村岡花子が人生の集大成に選んでしまったのか。

これは、彼女が、戦争の悲惨さから逃避することにすぎないのではないかと思うのです。

もちろん、私は戦争を経験された方に意見ができるような人間ではありません。しかし、私は精神病を患い、妄想の中で焼けつくような火に12時間焼かれたことがあります。私は逃避はしませんでした。ただ、その熱さを真から味わっていました。これから的人生の経験の一つの糧として。

## 逃げないこと

---

人生から逃げてはいけないのです。地獄のような世界からも、逃げてはいけません。しかし、どうしても耐えられない時には、自分で自分をいたわる、これしかないということを、私は最近、主治医の先生から教わりました。決して何にもぶつけない。しかし、聞いてもらう友達は有り難い。

村岡花子は、アンの、夢の世界に逃避したにすぎません。

逃避の先に何が待っているか・・・

恐ろしい責め苦です。

たくさんの人の、深い人生を、醜い色をした、「赤毛のアン」の、「赤」で埋めた村岡花子は、天国には行けてないはずです。何故なら、天国に行けるということは、世界でいちばんの深みを知っているかどうかにかかっているからです。